

街道

その歴史と役割

シルクロードのように、その昔の交易や物流の代表的な物品の名を冠した道が、日本国内にも少なからず残されています。そのうち、いくつかの街道を取り上げて、その街道が当時の金融や経済に果たした役割や背景についてご紹介しましょう。



(ちくにかいどう)

千国街道 塩の道

「敵に塩を送る」という言葉があります。大辞林(第三版)によれば「敵が苦しんでいる時に、かえってその苦境を救う」という意味で、「上杉謙信が、今川・北条の塩止めで苦しんでいる武田信玄に塩を送ったという逸話」が由来となっているようです。少し詳しく見てみましょう。

岩塩が採れない日本では、塩は海塩に頼るほかに、ことに長野のような内陸部にとって塩の確保は死活問題でした。そこで、長野へは、日本海側の糸魚川や直江津から地元産の塩をはじめ、日本海水運経路でもたらされる瀬戸内の塩が運ばれる道(北塩ルート)や、太平洋側から三河や瀬戸内産の塩が運ばれる道(南塩ルート)が使われていました。

ところが、戦国時代、このうち南塩ルートが駿河の今川氏と相模の北条氏によって断たれてしまいます(塩止め)。これを知った越後の上杉謙信は、「信玄と争うところは弓箭(ゆみや)にあり、米塩ではない」

として当時松本城にいた信玄に塩を送ったとされます。これが、先ほどの逸話であり、その「義塩」が運ばれたのが、新潟県糸魚川市から姫川沿いにさかのぼり、信濃大町、松本へと至る約120kmの「千国街道」で、日本の代表的な「塩の道」です。

千国街道では、5月から11月まで、険しい山あいの道を牛方が塩俵2、3俵を積んだ牛数頭を追いながら行き来しました。冬場は60kgもの荷を背負って歩くボッカ(歩荷)が運び、彼らのための宿が立ち並び、にぎわったといえます。

ところで、松本藩ではいつのころからか南塩の移入を禁止して、糸魚川の塩問屋が扱う北塩のみを認めました。そして千国番所では牛一頭がひく塩に大柙で2升の塩を上納させました。これは藩の財政をうるおしたといわれています。なぜ松本藩が北塩に限定したのかは定かではありませんが、一説には戦国時代の塩止



めに懲りたとも、また松本藩向けの塩市場の独占をねらった塩問屋の働きかけによるものともいわれています。美談として伝わっている謙信の義塩の逸話も、史実ではなく、塩独占を図る糸魚川塩問屋がイメージ戦略として創った話という説もあるほどです。

いずれにせよ、千国街道は長野の人の生活を支える「命綱」としての役割を果たすとともに、宿場に繁栄をもたらしたといえそうです。